

石上純也

「巨大さがひろがりのなかに
溶けていく建築」



東京藝大の自由な環境

藝大の大学院では益子義弘先生の研究室で学びました。

建築家としてのいまの自分につながっていることといえば、たまたまなんですが、中山英之さんや安宅研太郎さんや中村竜治くんといった面白い人達が近い学年にあつまっていて、いろいろ建築について話せたことかなと思います。

益子先生の指導を受けることにしたのは、さまざまな考え方に対してオープンな授業のスタイルだと聞いていたからです。当時はまだどういう方向で建築をつくっていくのか定まっていなかったもので、柔軟な環境で勉強するのがいいと思ったのです。仲間に恵まれたこともあり、有意義な学生生活を送ることができました。

建築における「あたりしさ」とは

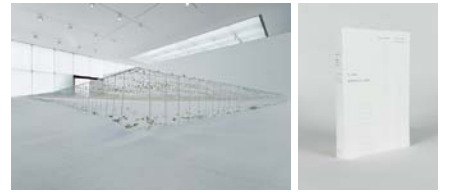
豊田市美術館の展覧会(二〇一〇年九月一八日―十二月二六日)は「建築のあたらしい大きさ」というタイトルですが、「あたりしさ」というのは、建築にとって必然的なものであるとぼくは考えています。

建築は永続的なものであると同時に、ぼくらの生活と密接につながってないといけない。しかし、生活というものは日々少しずつ変わっていくもので、建築の様式や空間のあり方、仕組みといったものも、少しずつその都度変化していく。住宅のように生活にもすごく結びついていて、あまり変化がないように思われているものでも、半世紀前と今とでは求められているものが全く違います。

ぼくは、常にあたらしく変わり続ける現在の生活スタイルや機能や目的といったものに対して、建物をやらかくフィットさせていくことをやっていきたい。だから、「あたりしさ」というものを、たんに奇抜であるとかいうことではなくて、建築のなかに必然的に備わり必要とされる、とても自然な当たり前の要素のひとつであると考えているのです。

また一方で、いま、時代は過去のどの時代とも違った次元に入りつつあるように思います。世の中が、日々の小さな当たり前の変化を超えた大きなパラダイムシフトのなかにあるように思うのです。というのも、ここまで自由に建築を考えられた時代はなかったのではないかと感じているからです。一般的に、建築は社会と結びつき、そこに根拠を求めることが多い。しかしながら、現在の社会のシステムは、それ自体がものすごく複雑化し、多くの情報が雨のようにランダムに降

左：石上純也「地平線をつくる」
photo:Yasushi Ichikawa
右：「石上純也 建築のあたらしい大きさ」
(青幻舎刊)



り注ぐ世界の中にある。つまり、そこからフィードバックしてくるものから、だれもが共有できる明確な未来像というものを、ひとつの理想的な社会として描き出すことが難しくなってきた。そういったなかでは、建築の形式を自由に開放していかなければ、逆に建築が社会との接点を見失ってしまうのではないかと考えられる気がしています。

大きく変わりつつある時代に対しての「革新性に繋がるあたらしさ」と、日々少しずつ普遍的に変わり続けていく日常を僕たちに馴染ませるための「自然さに繋がるあたらしさ」。このふたつのあたらしさは、多くのなかでは建築の根源的な部分です。

「半屋外」建築の可能性

豊田市美術館でも模型を展示した「地平線をつくる」は、ある大学から「学生がリラックスできる場所をつくってほしい」と依頼されて設計しているものです。建物とも広場ともいえる多目的施設で、半屋外が九五パーセント、屋内が五パーセント。柱は一本もなく、一〇ミリから五〇ミリの極薄の人工地盤を用いて、自然環境と人工環境の中間に位置するものをめざしています。

このような「半屋外」建築の可能性について考えるとき、スケール感というのは非常に重要だとぼくは考えています。およそ七〇〇〇平米という建築の面積がもつ大きさのいっぽうで、天井高は二・三メートルと住宅のような親密感を兼ね備えています。大きさと小ささが共存する、「あたらしい広大さ」といえるかもしれません。ぼくは、このプロジェクトを通じて、あたらしい自然環境のような景色をつくっていきたいと考えています。

今年(二〇一〇年)は二つの個展を実現させるとともに、ヴェネツィア・ビエンナーレで金獅子賞をいただくことができました。展覧会のいいところは、実際の建築とは違った可能性のなかでさまざまな実験ができることです。同時に、展覧会も実際の建築物も、デザインするかには、区別のつかないところまで追究しないと意味がないとも考えています。どちらにおいても、建築的思考を拡大する行為につながっていく心がけています。そういう意味では、ヴェネツィア・ビエンナーレで、国際的に認められたことは大きな励みになりました。

東京藝術大学で学ぶ学生の方にも、自由な価値観で軽やかに様々なことに取り組んでほしいと思っています。



いしがみ・じゅんや

1974 神奈川県生まれ / 2000 東京藝術大学大学院美術研究科修士課程建築専攻修了 /

2000-04 妹島和世建築設計事務所勤務 / 2004 石上純也建築設計事務所設立 /

2009 東京理科大学 非常勤講師 / 2010 東北大学 客員准教授

主な個展に「第11回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展」(2008)での個展、

「建築はどこまで小さく、あるいは、どこまで大きくひろがっていくのだろうか?」(資生堂ギャラリー・2010)、

「建築のあたらしい大きさ」(豊田市美術館・2010)がある。

2009「日本建築学会賞」を受賞。/ 2010「第12回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展」で金獅子賞を受賞。